

5年「情報を伝える人々」にプラスワン

(教科書では『小学社会5下』p.4~11)

この十年ほどで私たちを取り巻く情報環境は大きく変化してきた。スマートフォンの普及によって、インターネットはいつでもどこへでも持ち歩けるものになった。私たちは、情報を受け取り活用するだけでなく、誰もが情報の発信者になれる時代を迎えた。

そうした時代の変化に伴い、5年生の大単元「暮らしを支える情報」が果たすべき役割も変わってきた。つまり、情報を受け取る側だけでなく、情報を発信する側にも児童を立たせ、その際に配慮すべき知識やとるべき態度を指導していくことが求められるようになったのである。

第1小単元「情報を伝える人々」の学習では、緊急時の情報の伝え方やニュース番組づくりを取り上げ、情報産業やメディアの役割について調べ、情報が自分たちの生活に大きな影響を及ぼしていることを捉えさせていく。児童にとって、情報を入手するツールとしてのテレビは身近な存在だが、番組の作り手、情報の発信者の存在を意識することは少ない。ニュース番組を教材にすることで、情報には、発信者と受信者がいることを意識させ、どのように情報を発信していけばよいかを考えるきっかけをつくっていききたい。

1 「つかむ」段階に、情報を利用した経験をプラスワンして、学習を自分事にする

大単元のオリエンテーション(5下p.2)では、まちの様子を描いたイラストを見ながら、生活の中にもどのような情報がどのような方法で使われているかを探し出していく。イラストに描かれている地図や掲示板、商店の看板やのぼり、道路の信号なども情報を伝える方法だ。

こうして見ると、生活の中には情報が満ち溢れていることに児童は気付いていく。学校の中にも多くの情報を見つけることができるはずだ。

T) 学校の中、教室の中では、どんな情報をどんな方法で知らせているでしょうか。

児童は、教室をぐるぐると見まわしながら、どんな情報があるかを探していくはずだ。

C) 時計は、時刻を知らせている。

C) 壁に貼られた「今週の目標」は、みんなに気を付けてほしいことを伝えている。

C) 教室の入り口に「5年4組」と書いた札が付いているから、教室を間違えない。

教科書の中だけでなく、身近な場所に目を転じさせることは、学習を自分事にしていくことにつながる。さらに、生活場面へと意識を広げていく。

T) 君たちが普段気にしている情報は何ですか？

C) 天気予報。

C) 欲しい品物の情報。

C) 地震や台風の情報。

第1小单元「情報を伝える人々」では、災害時の情報やニュース番組づくりを扱う。あらかじめ、このようにして子どもたちから引き出しておくと、「自分たちの発言が授業をつくっている」「自分たちに関わりのある学習をしている」という意識をもって学習を進めていくことができる。

そして、情報の内容だけでなく、情報を伝える方法へと意識を広げていく。

T) 天気予報を知りたいときは、何をしていますか。

C) テレビです。

C) 新聞です。

C) スマホ。

T) 他にも天気予報を知るために、どんな方法があるでしょうか。

C) ラジオ。

C) インターネット。

T) 電話でも知ることができますよ。

T) 欲しい商品の情報は何をみればわかりますか。

C) 本や雑誌。

C) インターネット。

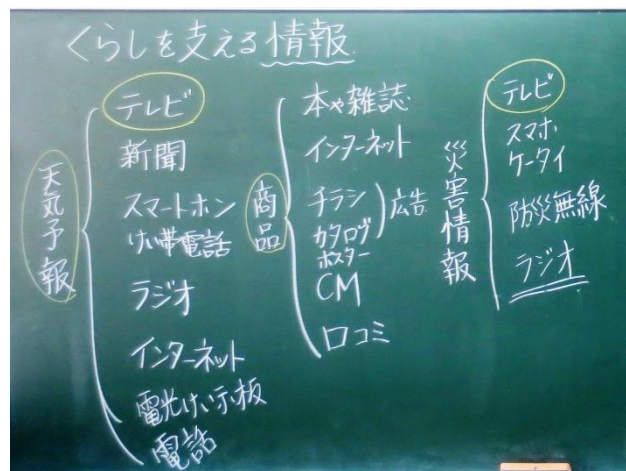
C) チラシ。

C) CM。

T) CMが流れているのはテレビですね。

C) 友だちに聞く。

T) 友だちの口から情報を聞くことを、口コミといいます。



このようにして、「商品情報」や「災害情報」についても入手方法を発表させていく。自分が経験していることだから、誰でも発言することができる。授業の導入段階では、特にできるだけ多くの児童に発言する機会をつくり、学習内容に対する興味・関心を高めていきたい。

そして、発表して終わりにせず、考える活動を入れることで、思考力を高めていく。

T) 君たちが情報を得る方法には、共通点がありますね。

C) テレビからの情報が多い。

第1小单元では、テレビのニュース番組が中心教材になるので、テレビに対する意識を高めて、授業を終えるとよい。

2 ニュース番組を見る活動をプラスワンして、ニュース番組をつくる「人」に目を向ける

「調べる」段階に入った2時間目では、テレビのニュース番組がどのようにつくられているのかを調べる。配当時間は1時間だけなので、ゆっくりじっくりと調べるわけにはいかず、教科書や資料集を読んでまとめるだけになってしまいがちだ。

教科書に示されているこの時間の課題は、「テレビで放送されるニュース番組は、どのようにつくられているのだろう」である。課題を提示した後には予想を立てるが、予備知識のない児童は予想を立てられないことが多い。子どもたちは普段、テレビを見ることは多くても、番組をつくる人たちのことを考えることは殆どないからだ。

課題を示した後に、実際にニュース番組を見せると、全員の問題意識を高めることができる。

T) これからニュース番組を5分間見せます。どのような人たちが番組をつくっているでしょうか。

C) アナウンサー。

C) 取材する人。

C) カメラマン。

C) 現場で取材するリポーター。

C) 音楽を流す人。

C) テロップをつくる人。

C) 映像を編集する人。

C) 照明を扱う人。

C) セットをつくる大道具の人。

短い時間でも、実際の映像を見ると、その制作には多くの人関わっていることが分かる。

T) ニュース番組づくりには、いろいろな人たちが関わっていきそうですね。実際は、どのような人たちがどのような働きをしているか、その人たちはどんな工夫をしているのか、調べてみましょう。

「人」「役割」「工夫」という調べる視点をもたせてから、調べる活動に入る。そうすると、教科書や資料集の情報を丸写しするのではなく、整理しながらノートにまとめることができる。

T) 一つのニュース番組を、これだけ多くの人たちでつくっているのはなぜでしょうか。

調べて発表して終わる授業にならないように、最後に考えを深める発問をして、番組づくりには多くの人々が関わっているが、目ざしていることは共通であることに気付かせていく。

C) ニュース番組を見ている人にわかりやすく伝えるため。

C) みんなが知りたいことを、早く正確に伝えるため。

ニュース番組づくりに欠かせない三つの要素「速報性」「正確性」「公共性」を引き出して授業を終えた。

この小单元では、視聴者の立場を離れて、番組のつくり手の立場に子どもたちを立たせる工夫をすることで、多角的に考える力を高め、情報を発信する側としてとるべき態度も身に付けさせていきたい。

(2016年9月)

あらし げんしゅう
嵐 元秀

東京都の公立小学校教師。教師歴28年。

楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく
社会科授業を目ざして研究・実践をしている。